

名古屋 文化情報

2015
9・10
September / October

No. 364
NAGOYA
Cultural
Information

随想／水谷 イズル（現代美術家） 視点／名古屋小劇場の未来を担う3人の若手演劇人
この人と／御原 祥子（舞台照明家） いとしのサブカル／長澤 唯史（椋山女学園大学教授）



2015

9・10

September / October

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 アートの力 創造する力
水谷イズル(現代美術家)…………… 3

視点
名古屋小劇場の未来を担う3人の若手演劇人…………… 4

この人と…
御原 祥子(舞台照明家)…………… 6

ピックアップ
「御園座を盛り上げ隊・勝手連」…………… 10

いとしのサブカル
長澤 唯史(椋山女学園大学教授)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

Voice III

(2013年/楠・ポルト・ナット・黒鉛/2670×1700×1600mm)

空間に佇み、自身と対峙する存在として「時間の流れ」を表現することを目指している。大きな動物と向き合っている時に感じるような、静謐かつ圧倒的な存在感と空気感、強い意志を持つ作品を、生み出していきたい。



撮影:早川 宏一

坂本 太郎 (さかもと たろう)

福井大学准教授

1970年 埼玉県生まれ
2000年 愛知県立芸術大学修士課程修了
以降、国内外で個展・グループ展などを多数開催

「2014年 名古屋市民文芸祭」
(第六五回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
川柳の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆ 名古屋市立有松中学校1年 奥山 幸香

努力して流した涙宝物

◆市会議長賞◆ 東海市立横須賀小学校2年 山村 美桜華

につきはねおもい出になるまほうだよ

◆市教育委員会賞◆ 名古屋市立駒方中学校2年 加藤 悠介

水浴びてダメな自分を流したい

◆市文化振興事業団賞◆ 一宮市立北方小学校3年 安達 孝太郎

両手がねつばさだったらとべるのに

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 椋山女学園大学附属小学校3年 今中 理栞

ごめんねとあやまるときが難しい

◆中日賞◆ 名古屋市立今池中学校3年 花木 優登

僕たちは国の未来を背負ってる

随想

アートのか 創造する力



みず たに

水谷イズル(現代美術家)

1961年生まれ。

平面と立体を組み合わせた作品や、光や映像、水などを使ったインスタレーション作品を発表。国内外で高い評価を得る。ニューヨーク、パリ、北京、上海、ソウル、 Санктペテルブルグ、バーゼルなどで展覧会を開催し活躍している。第23回芸術創造賞受賞。Art & Mind Center主宰。名古屋市文化振興事業団の芸術文化活動アドバイザーとしても活動している。

昨年から芸術文化活動アドバイザーとして市民の皆さんのさまざまなご相談にのらせていただいています。年配の方から、若いアーティスト、ときには子どもたちからの相談も。そのなかで、アートって特別な人たちのものだけではなく、すべての人に必要なものなんだと感じています。

みなさんは、アートをどのようなものだと考えていますか？ 趣味、楽しみ、飾り etc、もちろんそれも心豊かな人生を送るためにはとても大切ですね。でもアートにはそれだけではない、さらに重要な役割があります。それは「創造力」を育てるということ。創造力とは今はない新しいものを生み出す力のことです。これは人間に備わったとても大切な能力です。創造(クリエイション)は想像(イメージ)することから生まれます。イメージすることってとても大切です。人はイメージしたものを実現すると言われていました。たとえば頭のなかに理想の自分や夢を描くこと。「なりたい自分」「やりたいこと」「こんな世界になったらいいな」。人は夢を思い描くとワクワクしてきます。心の底からエネルギーが湧いてきます。夢を描くにはイメージする力が必要です。これは子どものうちにぜひとも伸ばしてあげたい能力ですね。

もうひとつ、アートには大切なことがあります。それは「表現する」ということ。「心」は目に見えませんが表現することで目に見えるようになります。心にしまっておいただけでは人には伝わりませんよね。表現することで初めて人とコミュニケーションをと

ることができます。言葉だけではありません。言葉にならない思い、感情などもアートを通して伝えることができます。

さらに、アートには「自分を知る」という要素があります。これは僕の経験ですが、絵を描いていると不思議なことに思いもかけなかった自分と出会うことがあります。時には自分の見たくない自分の姿を見ることもありました。一見ネガティブに思える表現が出てくることもあります。でも「善い悪い」はいったん横において、ありのままの自分を見つめ受け入れることで、本当の自分を知ることができるのです。表現することで人は自分自身の心と対話することができます。心の奥にしまっていた本当の自分の気持ちや、思いが絵に現れてくることがあります。一種の自己開示ですが、それをすることで心が晴れたり、気持ちが解放されることもあるのです。表現することは一方で自分の心を深く掘り下げることでもあります。表現の中は自由です。表現することを恐れずに続けていくとだんだん自分の心が深まり広がっていくのが分かります。

僕はアートの大切な役割は人間性の回復と解放だと思っています。自分の心と出会い、ひとの心を理解し、さらには、今はまだない理想の自分と未来を創る。アートには生きる力の源が隠されているのではないかと思います。アートの持つ力に触れることで、創造性に満ちた深みのある豊かな人生を送っていただけたらと願っています。

名古屋小劇場の未来を担う3人の若手演劇人

数ある文化ジャンルの中でも、小劇場演劇に関しては、組織や派閥に縛られない、ある種の柔軟さが特徴だと思ってきた。とはいえ世代間の溝は確かに存在し、昨今加速しているようにも思える。よく「最近の名古屋の若手はどうなの？」などとも尋ねられる。そこで、既に活躍中の刈馬カオス、渡山博崇、宮谷達也らよりさらに下の世代から、自分の好き嫌いを縦軸に、世間の注目度を横軸に、勝手に3人を選び話を聞いてみた。世代的な特色、価値観の傾向なども探りつつ。

(まとめ：はせひろいち)

「長谷川彩」のユニークな文学的気質

日本劇作家協会の第18回新人戯曲賞で最終ノミネート（優秀賞扱い）に残った実績を持つ長谷川彩氏の作品は、繊細で丁寧な会話の行間の中に、切実なリアリティーを孕む作風が魅力だ。今年の2月から3月にかけて行われた短編戯曲の祭典「劇王 天下統一大会2015」では、自作の「海獣日和」により東海代表に選ばれ、鹿目由紀の演出のもと決勝戦に進出。惜しくも大賞は逃すも出演者が俳優賞を獲得する健闘ぶり。その劇作の確かな文学性は世代を超えた支持を集める。

そんな彼女が演劇と出会ったのは高校生の頃。中学まで続けた吹奏楽部が高校にはなく、たまたま目に入った演劇部に入部し、2年の時の地区大会で初の書き下ろし。この評判も含め「自分に合ってる」と実感する。以来、長編で10本以上、短編は30本以上を書き続けている。その豊かな文体、ふれない台詞から、純粋な文学少女的イメージを抱きがちだが、必ずしもそうでもないらしい。「確かに幼いころから読書は好きで、小説も書きましたが、なぜだろう、大学生のころ、自分が実は文字を読むのがさほど好きではない、って事に気づいたんです。それより、人の話を聞く方がずっと楽しかった」とは本人の弁。ヒトへの関心が魅力になりうる戯曲の世界への、ある種の開眼とも言えるエピソードだ。

演劇に携わっていない時は「家でテレビを見てるか猫と遊んでる」という彼女だが、映画やDVDなどはほとんど見ない。「ずっと見続けるのがしんどいんですね。俳優の表情がアップになると面倒くさくなる。観る側の想像力を超える表現には、ホント幻滅してしまうんです」と長谷川氏。彼女の舞台表現への哲学が垣間見れる。

「一回書き終えると自分で飽きてしまって…」と、自らの傾向を語る彼女だが、日々、現実起きる事件からインスパイアされることも多い。「でも、私の側に書くための技術や経験が不足してて、書けないモチーフも多い。例えば何かの事件だとしても、それを客観視できない間は、被害者側に立ち過ぎてしまうから…」と、自分を見つめる姿勢も冷静かつ真摯だ。「でも、持ちすぎても感覚的に古くなる。そのタイミングが難しい」。

「劇作はどこに居ても発信できるから」という彼女は地元への執着も「結構強い」と言う。「劇団さよなら」のメンバーでもある彼女は、なかなか本公演が打てない環境にも関わらず、劇団を「心の拠りどころ」と考え「書き下ろしたい意欲はある」と言う。将来的な展望を尋ねると「劇団や幼いころから私が好きなことを認め応援してくれた家族のためにも、やはり賞はと

りたいですね。そして、認めてもらいたい人が、東海地区に多いのも事実」と語る。最近では役者として客演依頼も多く「得意ではない」という演出の仕事へも挑戦を続ける。そこには恐らく、他者への関心、人との関わりの中で自分が成長し、それが劇作への糧になるコトを本能的に感じている劇作家・長谷川彩の気質があるのだろう。

「戯曲はココで勝負できる」

長谷川氏



「吉田光佑」の本質をとらえる底力

2010年旗揚げの「room16」。その中心的存在である吉田光佑氏は現在32歳。room16では「ルームメイト」と名乗る劇団員にナンバーがついている。NO.01の吉田氏は、やはり旗揚げメンバーの「NO.00 八代将弥」と共同で作・演出を担う。その愛称は「SABO」。「もともと八代が書いて僕が演出、という分担はあるんですが、最近は構成段階から話し合ったり、彼の『もう書けない宣言』を受けて僕が引き継いだりもしています」と笑顔で話す吉田氏。実にユニークな二人三脚だ。「僕個人としては外部に書いたりもしますが、八代の書く会話は魅力的で締まる言葉を持っている」。もちろん2人とも役者兼任。結成6年で10本の本公演をこなし、第5回公演では、G/PITのフェスティバルで大賞を受賞。2012年には1ヶ月のロングラン公演を成功させ、日本劇作家協会東海支部主催の「劇王子」にも参戦し決勝進出を果たした。昨年の「ラクダ」では名古屋演劇杯大賞と NO.05 藤島えり子の最優秀俳優賞をダブル受賞。今年7月の第10回記念公演「道化ボレロ」では「若手劇団とちくさ座によるパートナーシップ公演」に採択され集客を増やした。さらに初の県外進出として、7月末に「利賀演劇人コンクール」に参加。吉田氏がテネシー・ウィリアムズの「財産没収」に挑戦した。

「僕はそもそも映画俳優志望でした。東京に憧れ1ヶ月上京。当時は事務所なんてチャイムを鳴らせば入れるものと信じてた」

と懐かしそうに話す吉田氏。今の面々とは名古屋のタレント事務所で出会い、卒業時に劇団を作った。主要メンバーは5人。うち4人がキャストで、最新作では客演が12人。吉田氏の演出に力がなくては成立しない。「途中で抜けたり、東京に行った仲間もいますが、彼らのルームナンバーは永久欠番として残している。僕自身はこの土地にしっかり根付いて続けていきたい」。集団としての核を堅持しながら、作品に合わせ客演を迎えていく柔軟さ。彼らの持ち味なのだろう。

room16の名の由来は「最初に集まったカラオケルームの部屋番号」。作・演出の共同ネーム「SABO」は、前に舞台で使った人形の愛称から来ている。そんな「軽いノリ」を大切にしながら、荒削りながらも力強い、骨太の作品を作り続ける彼ら。もしかしたら「演劇に詳しくなくて」という姿勢、演劇臭さの影響を受けてない姿こそ最大の武器かもしれない。事実、バンド経験のある吉田氏が提案する劇団の発声練習は「ラップ」だ。

最後に憧れの先人を尋ねたとき「これまた勉強不足で…」と前置きしながら「鐘下さんの戯曲は気になります。あの熱量が」と話してくれた吉田氏。それは「道化ボレロ」で問題の本質にしつこく粘って成功した、筆と演出の底力にも共通する。目を離せない集団である。



「自分たちの熱量を信じたい」
吉田氏

挑戦を続ける「かしましげみつ」

ネーミングセンス光る「孤独部」とは、2009年に設立した、かしましげみつ氏が全作品の脚本・演出を務めるユニットだ。作品に応じメンバーを募る形式。短編を中心に、ライブハウス、ギャラリーなど、既成の枠にとられない空間で次々と作品を発表。ミュージシャンとのコラボで東京・大阪を回ったり、リズムやコンテンポラリーダンスを積極的に取り入れたり、常に新しい演劇を模索し続けている。2012年に年間20作品、2013年には年間30以上の作品を創作。彼の紡ぐ台詞は、時に日常的で、時に詩的、時に沈黙を駆使し、同世代の共感呼び、人気を博してきた。2014年には単独公演「さいごのうた」にて愛知県芸術劇場小ホールに進出。同年のAAFリージョナル・シアターにも抜擢され「文豪コネクション」の企画で「こころ」を演出。中規模劇場でも通用することを証明しつつ支持する観客の層も広がった。

もともとバンド志向だった同氏が、演劇に出会ったのは高校2年。クラスの演劇部女子に頼まれ、本番で箱馬を動かす手伝いをした。「あの袖から見た舞台。あの感覚が全ての始まり」

と話す。大学時代に学生劇団に入り舞台経験を重ね、3年の時に孤独部を立ち上げた。

「実は卒業後、京都で就職したんです。塾の講師だったんですが、どうしても自分に合わず、悩んだ末に辞めて名古屋に戻りました」と照れくさそうに話すかしま氏。逆にこの経験が、表現者・かしまに人生の覚悟をさせた。「中学の恩師に紹介してもらった仕事でした。コレから逃げる以上、本気になる以外なかった」と振り返る。その決意は実を結び、今年に入ってから、先述のroom16同様「若手劇団とちくさ座によるパートナーシップ公演」に推挙され、新作「大学生」を発表。さらには愛知人形劇センター企画の『劇作家とつくる短編人形劇』でも2本の短編を発表。平塚直隆、渡山博崇らと肩を並べながら、一歩も引けを取らない独自の世界観で、時に楽しく、時に切実に描き切った。自身は客席の最後列で、今度はエレキギターを演奏していたという。

「演劇を更新するだけでなく、根本からひっくり返したい」と語るかしま氏の目には強い光が宿っている。もともと演劇畑だけでの成功を眼中に置いていない彼ゆえ、言葉にも説得力がある。そして、その戦いのホームグラウンドは「名古屋で構わない」という。「もともと僕の描く世界は自分の話です。一人の部屋で感じる、普通なら言わないコンプレックスだったり、本音だったり。それが『誰でもない誰か』の話になればと思うし、誇張したドラマではなく、その辺を歩いている人の人生になればいい。それが『孤独部』。東京と戦ってもしようがないと思うんです」とかしま氏。ライブやコラボで大都市経験を重ねた実感値でもあるだろう。「現代思想に行き詰った世界を革命的に変えたい」と語る、舞台遊びの達人は、最後に大学で哲学専攻だった顔を覗かせた。

「革命的に変えたいんです」
かしま氏



若手を精神的に支える豊かな土壌

今回紹介した3名に、あえて共通性を探るとすれば自分たちを見つめる冷静さと意外な地元志向だろうか。少なくとも花の東京を最終目的に、躍起になる時代ではないようだ。さらに付け加えるなら、彼／彼女らの活動を支えるモノとして、日本劇作家協会、日本演出者協会など外部団体、ちくさ座に代表される文化行政の支援、名古屋演劇杯、ミソゲキなど民間の各種演劇祭が挙げられる。決して規模や支援の大きさではなく、それらへの参加や評価自体が彼／彼女らに「認められた」自信となり、精神的なゆとりと繋がっているのは確かなようである。

この人と...



舞台照明家

御原 祥子さん

強い主張をしないが 確かに存在する光を求めて

舞台上で繰り広げられる芸術作品を浮かび上がらせ、いわば影の立役者であり無くてはならない存在の照明。芸術家とともにクリエイティブな活動をされている舞台照明家の御原祥子さんはこの道一筋。名古屋生まれの初代女性照明家といっても過言ではなく、現在も舞台現場で活躍し、また公益社団法人 日本照明家協会副会長としても活動をされている。自然体で穏やかな人柄の奥にあるパッションとぶれない軸の源に触れさせていただいた。（聞き手:倉知 外子）

今、思えば導かれていた

昭和20年10月に神奈川県鎌倉市に産声をあげ、御原祥子さんの命の営みがスタートした。まさに母胎で戦時中を過ごし、戦後の生まれである。神戸出身の父、鎌倉出身の母、兄の4人家族で、名古屋の布池教会界隈にて成長した。昭和58年に名古屋市芸術創造センターが開館した時は、懐かしい思い出が甦ったとのこと。幼少期から育ったその近所に佐々智恵子バレエ研究所があり、佐々良子さんとは、子供会などで一緒だった。近所の友達が習っていたこともあり発表会などをよく観にいったが、自身で習ったのはモダンダンスで、奥田敏子氏に幼稚園の年長1年間であった。その当時にモダンダンスを習わせる母親は稀であった。「今日に至り洋舞界の仕事が主となっているのも幼少時代からの、自然な導きであったのかな」と述懐され、同年代のご近所仲間に、現在、活躍されている芸術家が数人写っている子ども会の写真を拝見した。家庭環境は、父は海軍の軍人から戦後に会社経営、母は航空省の専門職を持つ自立した有職婦人、兄は高校演劇をやり、自身は高校で美術部に所属し絵が好きだった。女性が仕事を持つ

ことは当然のことと思っていたが、高校生の頃は具体的な方向はなく、大学受験の浪人中にいろいろな出会いと縁で若尾正也照明研究所（現 若尾総合舞台）へ昭和41年に入社した。そこには、戦前から照明の仕事をしていた若尾隆子氏との出会いがあった。



幼稚園の頃 名古屋市内にて

2人の母

御原さんは2人の母に育てられたとのこと。実の母は、戦前に石井漠の公演を観ていたし、鎌倉にバレリーナのエリアナ・パヴロワが住んでいたことなど、舞台について何がしかの関心をもっていたようだ。御原さんが3歳の頃、名古屋に移り住み、母がいつも凶面を引いていた姿を覚えている。子供の意志を尊重し自由にしてくれたし、戦後間

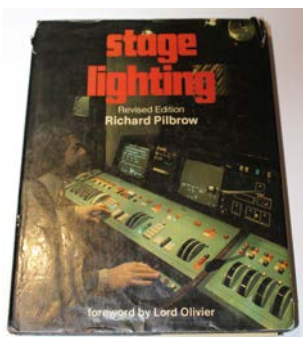
もなくの頃、世の中に民主主義、自由主義の風が吹く中で伸び伸びとさせてくれたようだ。もう1人の母は、若尾隆子氏。若尾総合舞台の創始者 若尾正也氏の妻で、戦前から東京宝塚劇場で照明の仕事をしていた。戦後、若尾夫妻は名宝劇場に転勤となりしばらく勤めて、若尾正也照明研究所を設立する。御原さんが入社当時、8人ほどの女性がいたが、隆子氏が御原さんを名古屋生まれの初代女性照明家に育て上げたと言っても過言ではない。沢山の事を教えられ、可愛がられた。



実母(右)と仕事の母(左:若尾隆子氏)

専門誌の出会いと若尾正也氏の存在

照明のオペレーターの仕事をして10年くらい経験し、照明デザインの仕事をするかどうかもわからない頃、ロンドンの古本屋で、照明専門誌を偶然とっていいくらいの感覚で手にとり、生涯のバイブルになった。それは全てが英語版で辞



ロンドンで購入した照明専門誌

書を片手に必死に読み解いた。日本にはまだ、それほどの照明専門誌が無かった頃の事である。

若尾正也氏は経済的には厳しい時代でも欲がなく「良いものを創ろう」という精神を持った人で、戦後の名古屋の文化を築く上で舞台関係者に大きな影響を与え、名古屋の文化芸術の発展に絶大なる貢献をした存在であると御原さんは言う。現在は、舞台機構の技術開発により資金調達ができれば高性能な設備を用いて何でもできるが、削る作業に心を向けてほしいとチョップリ苦言を。今は舞台関係の会社が林立しているが、若尾総合舞台からの独立が多いと聞く。御原さんは今、あらためて若尾氏の精神を尊く感じている。

現場での修行

若尾総合舞台に入社当時、中日劇場が開館し、照明に配属された。舞台美術の仕事をしたと思っていたので、照明の仕事に携わるとは全く考えていなかった。若尾総合舞台の先輩デザイナーとの仕事も多く経験したが、中日劇場で上演される作品のスタッフ



現場での仕事風景

の中で照明デザインは東京の著名なデザイナーが殆どで、良い修行時期であった。東京の舞台照明家、相馬清恒氏、穴沢喜美男氏、大庭三郎氏、今井直次氏、吉井澄雄氏、沢田祐二氏他との仕事が全ての入り口だった。すなわち人との出会いがラッキーであり、そこでの仕事が成長させてくれた。現在はインターカムと呼ばれる音声通信設備により離れた場所でも情報を共有できるが、当時は整備されておらず自分達で判断して決定したりする時代だった。主としてピンスポットライトといって、演技者をフォローするライトで、当時は個々で判断するしかなく、きちんとやる優等生ではなかった御原さんにとっては、自分なりの工夫と試みができるのがよかったし、多様な作品を舞台正面から見られたのも多大な勉強になった。30歳を過ぎた頃、大庭三郎氏に期待され、「名古屋の若手女性オペレーター」として照明界で知られるようになった。また、大庭氏から、ある時「女性は照明デザイナーに適している」と言われて希望を持てたことなどは、様々な意味で大きな財産となっている。その中日劇場で経験した思い出深い主な名作舞台は、六代目中村歌右衛門と二代目中村鴈治郎の「隅田川」、杉村春子の「欲望という名の電車」、山本安英と宇野重吉の「夕鶴」、越路吹雪のドラマチックリサイタルなどであった。



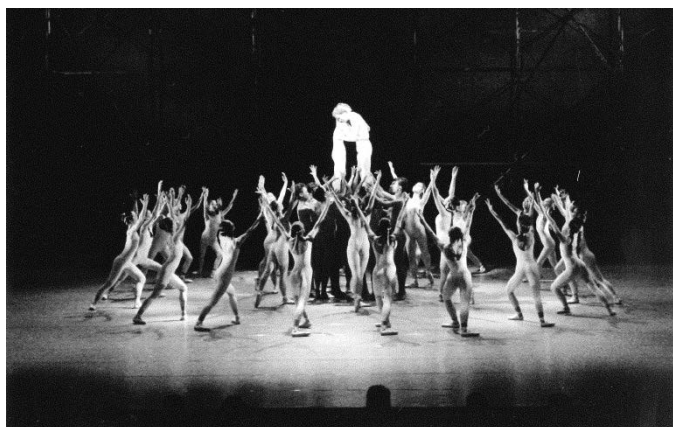
大庭三郎氏との出会い

舞台照明家の仕事とは

舞台照明とは二次的な仕事で、出来上がった作品・被写体に明かりをあて完成させる。その時その現場で瞬時に判断する感性が求められ、瞬間に消えていくもので多様なものがあることをお客さんに伝えたい。御原さんの仕事はバレエ、現代舞踊、オペラ、ミュージカル、歌舞伎、演劇など幅広い。その仕事は、作品を見て、作者の意図を受け取り、照明デザインをすることだが、その為には感性が求められる。御原さんは、デザインをするための基本的なコンセプトは、説明をしないこと、枠をつくらないで自由でシンプルであることとしている。故に、若い後輩達に好奇心旺盛に広汎な体験をし、物事を深く考える感性を豊かにしてほしいと期待を寄せる。

手掛けた作品で受賞

昭和61年度 日本照明家協会賞舞台部門特別新人賞を佐々智恵子バレエ団「カルミナ・ブラーナ」、平成元年度 名古屋市文化振興事業団芸術創造賞、平成13年度 日本照明家協会舞台部門特別奨励賞を松岡伶子バレエ団「あゝ野麦峠」で受賞をされた。



佐々智恵子バレエ団「カルミナ・ブラーナ」



宮本亜門演出オペレッタ「メリー・ウィドウ」

現在の仕事に充実感を

10年前に、40年勤めた若尾総合舞台を定年退職。後にフリーランスになっても個人指名で現場の仕事が絶えない。現在、2008年に立ち上げられた「LDC-J」ライティングデザイナーズクラブオブジャパンのデザイナーズクラブに入会している。名古屋の会員は御原さん1人で大阪、東京のデザイナー30人（女性3人）との交流をして更なる刺激を受け、研究に余念がない。また、公益社団法人 日本照明家協会の副会長の仕事では、東京に頻繁に足を運ぶ。名古屋の後継者育成も長年されているが、講義や審査員の仕事などを通じて、年々増してきた若手の女性照明家に熱い視線を注いでいる。

名古屋の舞台照明家の未来

昭和の時代は照明デザイナーだけが東京などから来て、現場スタッフは地元の人達を起用して育てていたが、今はスタッフ全てが東京から来る。現場での作業に時間をかけていられない、短時間でつくり上げる状況にあるようだ。名古屋市文化振興事業団の総合舞台芸術公演では、演出家は東京人で、他のスタッフは地元人と住み分けている。地元のスタッフが一緒に考えつくり上げる環境を仕掛ける努力をして、育ててほしいと願う。一方、スタッフ側のみでは成り立たないことで、作品を創造する側と相互の関係が活発になってほしいと提言をされる。

プライベートな楽しみは料理と旅行

家族のために、男料理のようにスペシャルな食材で料理をするし、日常生活でも料理は好きだと言われた。両親は亡くなりお兄さんの家族と同居、そのお孫さんたちは御原さんをおばあちゃんと呼び、御原さんはとても可愛がっている。ご自宅に伺っている時も、お孫さんたちの可愛い声が聞こえ、なぜかふわりと温かい空気を感じ、緊張を和らげ疲れを癒してくれる御原さんの家庭がそこにあった。

初めての海外旅行は当時のソ連だった。フランス、イギリス、アメリカ、イタリアと仕事や私的にも出かけ、今夏もイギリスへ。フランスでは舞踊家の友人の母娘（フランス在住）と劇場三昧で過ごす。全てから解放された時空間を真に愉しんで満喫されているが、やはり仕事に繋がっている。

古稀という年齢を迎えて

年間に40本以上の公演をこなしたが、1週間に3〜4本の公演がある時は多忙の極みであった。その様な時期を越

えて現在があり、年を重ねてきたからこそできる事を大切にしたいという。今この年齢になって「己は？」と考える機会が多くなり、自身について「あるがままに、自己を否定せず、無理押しせず、媚びず、流されずに自然体に生きてきたつもり」と振り返る。また、現場での仕事は重い照明器具を扱い、高所での仕込みなど重労働と伺っているが淡々とした表情で語られているのが印象的であった。ここに御原さんのぶれない軸があり、秘められたパッションを内蔵されているのだと気付かされた。インタビュー中、芸術談義に

花が咲きつつも、御原さんの照明に対する変わらない姿勢や芯のある生き方について触れることができた。それらは、仕事から得た自信と充実感の証しであると感じた。未完の極みに無理なく歩み続ける御原さんの光には、更なる透明感が増していた。



第58回
現代舞踊公演 ダンス・バラダイス2015
(名古屋市芸術創造センターにて)

主な照明デザイン作品

50年間に手掛けた作品の照明は膨大な量であるので、かなり絞り込み、列挙してもらった。名古屋市文化振興事業団主催のミュージカルのほか、愛知芸術文化センター主催公演や名古屋洋舞家協議会、一般社団法人 現代舞踊協会中部支部公演、公益社団法人 日本バレエ協会中部支部公演など舞踊作品が数えきれないほど多数ある。

2015年2月に、静岡にて上演された平山素子氏の作品「HAGOROMO 水鏡の天女」では、「御原祥子の照明は円錐形に降り注ぐ幾重もの淡い照明が天女の清澄な心の内まで照らし出した」と専門誌に評価されていた。



あいちトリエンナーレ2010 祝祭ウィーク『躍動の祭典』より
野々村明子作品「天の鏡」

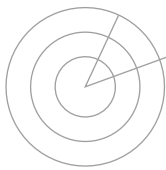
【主な作品一覧】

- 宮本亜門演出「メリー・ウイドウ」
- 坂上道之助演出「アニーよ銃をとれ」
- 松本重孝演出「フィガロの結婚」
- 菊本健郎演出「ショウ・ボート」
- 木佐貴邦子&カール・ストーンのコラボレーション「空間創出」
- 和栗由紀夫舞踏作品
- 手塚真演出 ダンス「UZUME」
- 折田克子振付「夏畑」
- 石井潤振付「血の婚礼」
- 西田堯振付「地霊たちの喜遊曲」
- 佐々智恵子バレエ団
「白鳥の湖」、「カルメン」、「 Coppélia 」、「くるみ割り人形」、「カルミナ・ブラーナ」
- 松岡伶子バレエ団
「ライモンダ」、「ラ・バヤデル」、「ドン・キホーテ」、「あゝ野麦峠」、「シンデレラ」、「ラ・シルフィード」
- 越智インターナショナルバレエ
「くるみ割り人形」、「ジゼル」
- 安田美香子バレエ団
「眠れる森の美女」、「Coppélia」
- ステップ・ワークスバレエ
上田遙振付「椿姫」、「智恵子〜わが愛」
中島伸欣振付「月の枢」
- 野々村明子 DANCE SPACE
「一度霧の彼方へ」、「アマリリス—五つの開花」、「三人の婆婆」
- 猪崎弥生ダンスグループ
「玄花」、「場の記憶」、「明日の眼差し」
- ヒデ・ダンス・ラボ
「白日夢」、「奇妙な男のワルツ」
- 平山素子振付「白鳥の湖」、「神舞」、「雪女」、「Juliet」、「HAGOROMO 水鏡の天女」
- 三代真史振付「ジス・イズ・レノン」
- 倉知可英振付「光の記憶」
- 喜多郎「新潟北方 博物館50周年コンサート」
「伊勢神宮内宮コンサート」
- 劇団うりんこ「老人が来た」、「女王様弟を助けて」、「かんづめぼうやコンラッド」、「シェイクスピアを盗め」、「妥協点 P」

索引|.....

- 石井漢
モダンダンスの先覚者
- エリアナ・パヴロワ
1920年に日本に亡命したロシアの貴族出身のバレリーナ
- 大庭三郎(1912-1998)
昭和15年に大庭三郎照明研究所を設立した、昭和~平成の舞台照明家
代表作「屋根の上のヴァイオリン弾き」「放浪記」「マイフェアレディ」ほか
- 吉井澄雄
公益社団法人日本照明家協会名誉会長
- 沢田祐二
公益社団法人日本照明家協会会長

ピックアップ



「御園座を盛り上げ隊・勝手連」



再建後の御園座イメージ
「『(仮称)栄一丁目御園座共同ビル計画』
 建設事業に係る環境影響評価書」(名古屋市)より

御園座の再建工事が着々と進んでいる。明治30年5月の開場以来、終戦の年には空襲で焼失・再建、また昭和36年にも不慮の火災で焼失・再建など、幾度もの危機を乗り越えてきた御園座だが、今回は、時代の波に飲まれた形での再生となった。

御園座といえば、歌舞伎をはじめ、日本舞踊などの伝統芸能、あるいは芝居の“晴れ舞台”として親しまれてきた。御園座に行くから新しい着物を作らなきゃ、という観客も少なくなかったし、演じる側にとっても、舞台の使用料が公設のホールより10倍以上と、敷居の高い存在だった。御園座はまさしく夢の舞台として君臨し続けてきたのだ。

そうした御園座の再生を応援しようと、伝統芸能の関係者による「御園座を盛り上げ隊・勝手連」が組織されている。平成26年秋に発足し、同年9月21日に第一回、翌27年3月15日に第二回公演が、御園座向かいの宝飾店・居東屋の4階能舞台で行われた。

呼び掛け人である日本舞踊の花柳流師範・花柳朱実さんにとって、御園座は幼い頃に歌舞伎や芝居公演の子役として出演した思い出深い場所。さらに“芸どころ名古屋”のシンボルとしてなくてはならないものだった。御園座のために何かできたら・・・と「駄目元」で呼び掛けたところ、出演者やスタッフが次々と集まった。御園座のそばで工事の無事を祈願し、奉納したいとの思いが詰まった公演は、大好評を博した。

そして第三回となる今秋は、9月13日(日)、花柳朱実さん主催「朱ざくら会」公演の第二部として、「春夏秋冬御園賑 一幕 ―季節はめぐり三度目の春を待つ―」と銘打ち開催される(詳細は末尾に)。花柳流の群舞による長唄で賑々しく始まり、清元、謡曲の連吟、大和楽、小唄、端

唄など多彩な演目が続く。出演者も、花柳朱実さんをはじめ、日舞の工藤寿々弥さん、西川えつさん、五條園美さん、地唄舞の山村楽乃さん、小唄の稲舟妙寿さん、長唄三味線の杵屋三太郎さんなど、当地の実力者が勢揃いする。

かつては、このように流儀やジャンルを越えた催しは難しかった。それが実現したのは、御園座のためにと願うとともに、伝統芸能の存続をかけて、との思いも一致しているからだ。朱実さんは、これこそ「芸どころ名古屋」の心意気だという。

御園座の再生計画によれば、従来の主力であった歌舞伎や文芸芝居・座長公演等に加え、これまで設備上の制約から実施されてこなかったミュージカル等に力を入れ、市場を獲得していくことが「生き残りの鍵」だとされている。全面的に建て替える以上、多目的の劇場を目指すのは必然だとしても、“庇を貸して母屋を取られる”結果になっては寂しい。

「御園座を盛り上げ隊」の公演は、今後も毎年春秋2回のペースで御園座再開まで続けられるという。「盛り上げ隊」を盛り上げる気持ち、それもまた“芸どころ名古屋”の伝統を支える大きな「心意気」となるだろう。(Y)



◀ 第1回御園座を盛り上げ隊・勝手連公演 小唄 白扇

第2回御園座を盛り上げ隊・勝手連公演 手じめ ▶



公演情報

第二十回 朱ざくら会 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール
 一部 花柳朱実社中公演 午前11時開演(全自由席・3000円)
 二部 御園座を盛り上げ隊・勝手連 特別公演
 午後6時頃開演(入場無料)

いとしの サブカル

読書で人と人がつながる街

梶山女学園大学教授

長澤 唯史

1963年、静岡県生まれ。慶応義塾大学大学院修了後、豊田工業高等専門学校教員を経て現職。現代アメリカ文学や日米のポップカルチャー研究が専門。名古屋SFシンポジウムやSF読書会の企画運営にも携わる。

「燈火とう かつうや稍べく親かんしむ可べんけんじょく／簡編卷舒すべし」。「秋になって日が短くなったら、灯りの元で書物を開こうよ」という、唐の詩人韓愈かん いくのこの一節が、「読書の秋」の由来だそうです。そろそろ読書の季節ですね。そしてせっかく本を読んだなら、それを人と分かち合ってみてはいかがでしょう。私も大学のサークルで「読書会」と出会い、みんなで同じ課題図書を読み議論や意見交換をする楽しさを知りました。もちろん素朴な感想から深く掘り下げた分析まで、読み方はさまざま。でもどれが正解というわけではなく、いろんな読み方があることがわかれば、自分の読書がさらに広がります。

名古屋市内やその周辺で、たくさんの読書会が開かれているのをご存知でしょうか？「日本最大級の読書会コミュニティ」と呼ばれている「猫町倶楽部」は2006年に名古屋でスタートし、今では東京や関西にもその活動が広がっています。課題図書もビジネス書、文芸書から哲学書、はてはBLまで。さらに映画についてのトーク、書評講座や講演会など、自分の興味関心に合ったイベントに参加できます。

自分の好きなジャンルについて、同好の士と語り合うイベントもあります。その代表が、翻訳ミステリー大賞シンジケート主催のミステリー読書会。これも北海道から福岡まで日本各地で開催されていますが、その中でも名古屋読書会は全国屈指の人気ぶりです。名古屋在住の書評家、大矢博子さんが幹事となって、年3回ほど開催されていますが、その和気あいあいとした雰囲気最大の魅力。約40名の定員がほぼ半日で満席となるほどの盛況

で、毎回遠方から参加される方も少なくありません。さらにプロの翻訳家や作家、編集者などの豪華なゲストから、意外なウラ話なども聞けます。このミステリー読書会に触発されて、2014年からは名古屋SF読書会も始まりました。やはり名古屋在住のSFライター、渡辺英樹さんや私が幹事となり、SFの楽しさを広く知ってもらおうと、古典的な作品を中心に課題図書を選定しています。

さらに、こうした読書会から派生した各種イベントもあります。私が勤務する梶山女学園大学では、上記の大矢博子さんやミステリー作家の水生大海さんに、本学教授の堀田あけみさんを加え「女性作家・評論家によるパネル」を開催しています。本年度は作家の後藤みわこさん、吉川トリコさんもメンバーに加わり、とても賑やかなトークでした。また昨年から、名古屋SFシンポジウムというイベントも始まっています。本年度は9月26日(土)に、プロの作家、翻訳家の方たちをゲストにお招きして開催される予定です。

こうした読書関連のイベントは、さまざまな人と出会い自分の世界を広げられるのも大きな魅力です。ぜひ多くの方にご参加いただき、名古屋の読書文化がさらに盛り上がっていくことを期待しています。



読書会のレジュメ

ユネスコ無形文化遺産
人形浄瑠璃

文楽



絵本太功記

人形浄瑠璃「文楽」は、日本を代表する伝統芸能の一つで、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術です。太夫の語り、三味線の音、3人遣いの人形で複雑なドラマを表現します。

解説では、文楽のあらすじを出演者がわかりやすくお話し、みどころをお伝えします。

今回の公演も、電光表示パネルを舞台下手脇花道に設置し、初めて鑑賞する方でもお楽しみいただけるように字幕を表示します。

開催日時 10月2日(金) 昼の部:14:00~16:45
夜の部:18:30~21:00

会場 名古屋市芸術創造センター

演目 **昼の部**

だんごうり
「団子売」
しんじゆうてんのあみじま てんまかみやうち
「心中天網島」天満紙屋内の段、
やまとや みちゆきなご はし
大和屋の段、道行名残りの橋づくし

夜の部

えほんたいこうき ゆうがおたな あまがさき
「絵本太功記」夕顔棚の段、尼ヶ崎の段
ひだかがわいりあいざくら わたし
「日高川入相花王」渡し場の段



日高川入相花王

【写真 青木信二】

入場料 〈全指定席〉各部とも ※未就学児入場不可

【一般】	【事業団友の会会員】
一階席 4,700円	一階席 4,200円
二階席 2,600円	二階席 2,300円

チケット取扱い

名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387

(平日9:00~17:00/チケット郵送可) ※事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。

チケットぴあ TEL 0570-02-9999 Pコード 444-730 サークルK・サンクス、セブン-イレブン

主催 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団
公益財団法人 文楽協会

アイデアを広げる
ワンランク上の印刷を

事業内容

- UVコールドフォイル印刷
- UVホログラム転写印刷
- UVコーター付オフセット印刷
- 一般オフセット印刷
- 3D印刷
- バリエブル(可変データ)印刷
- Mac・Win・DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

鬼頭印刷株式会社 Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
〒456-0073 名古屋市熱田区千代田町3-22 data@kito-net.com www.kito-net.com

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。

ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

20Hz ← → **20kHz**

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK

舞台音響 / 映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社 マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail : mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営